

戦後日本の人類学史 (2)

中生 勝美

桜美林大学リベラルアーツ学群

History of Japanese Anthropology after the World War II (2)

NAKAO Katsumi

College of Arts and Sciences, J. F. Oberlin University

キーワード：泉靖一、経済安定本部資源調査会、ユネスコ、南米移民調査、アマゾン考古学

第5章 東京大学の海外調査

第1節 泉靖一の日本研究：南米調査前史

東京大学の人類学研究として、泉靖一の働きは特記に値する。泉は、戦前の京城帝国大学で教育を受け、中国東北部、内モンゴ、ニューギニアで調査経験を積んだ。1949年4月、父が奉職していた明治大学に就任したが、51年11月には東京大学に移った¹。

まずは、泉が南米にかかわりを持った経緯に関係する経歴を追っていこう。泉の強力なリーダーシップの手腕は、京城帝国大学時代からの経験によって培われていた。泉は、京城帝国大学の人脈を使いながら、人類学とは異なる活動もおこなっている。その代表が、「在外同胞救護会救療部」である。これには、次のような経緯があった。

1945年8月15日の敗戦後、京城では日本人引き揚げのため「京城内地人世話会」が組織された。泉は、世話人会から同年9月中旬に引揚者への診療と衛生管理の組織発足を依頼され、京城帝国大学の医学部人脈で罹災民救済病院を発足させた（藤本 1994：201-202）。泉は同年12月18日に博多へ引き揚げたが、罹災民救済病院を京城から博多に移転して継続させるため、外務省の外郭団体の在外同胞救護会と交渉し、「在外同胞救護会救療部」へと改組した。

泉は、1949年3月に在外同胞救護会を辞任し、4月より明治大学政経学部の助教授に就任して、アカデミズムに復帰している。これは、戦後の混乱から抜け出すとともに、医者ではない泉にとって転機となった。その後救療部は医療機関へ引き継がれている。泉の父

親は明治大学の政経学部創設に貢献し、その弟子が明治大学に在籍していた。泉はその関係で明治大学の助教授に採用された。それと同時に、経済安定本部の資源調査会の専門委員に就任した。経済安定本部の仕事は京城帝国大学時代に世話になった尾高朝雄からの依頼だった(藤本 1994:214)。

経済安定本部資源調査会は、会長が東京大学教授の安芸峻一で、敗戦の日本を復興させるための総合計画を立案しており、泉が担当したのは、水の総合利用に伴う補償の問題だった。ダム建設のため水没地に対する土地や建物への物件補償の検討であった。そのために、奈良県十津川村と、その分村である北海道の新十津川村などの調査をおこなった。

十津川村の調査は、十津川村から北海道に移住した新十津川村の調査とともに経済安定本部資源調査会の報告書として刊行された(経済安定本部資源調査会編 1949a, 1949b)。その後、十津川村の報告は『社会学講義資料：或る文化変遷のモノグラフ』(泉 1951)にまとめられた。その要約が著作集の「村落組織における血縁結合と地縁結合」にある。当時の母村と移住村の比較による文化変容というテーマは、その後のアマゾンへの移民のテーマにつながっている。

朝鮮で育ち、朝鮮や満州での調査経験のある泉にとって、日本国内での調査は十津川村が初めてで、日本を知るうえで役に立ったと述懐している。そして調査を通じて、水没地や総合計画の被害地の補償は、物件補償でなく生活崩壊に対する補償でなければならない、と提言をした(泉 1972:7巻:304-305)。その提言が、著作集2に採録された「生活崩壊の補償：水利用計画に伴う広汎な水没補償問題に対する考え方」である。

泉は明治大学に赴任して明治大学社会学研究部の顧問となった。そこで泉に指導を受けて社会人類学の後継者となったのが蒲生正男である。蒲生は、泉靖一の十津川村の社会調査に同行し、報告書を書いている。蒲生は、社会的緊張の研究で、ダム建設をめぐる生活補償の問題で、十津川だけでなく宮崎県椎葉村でも調査をしている。ダム建設の調査について、意識調査にT・A・T(Thematic Apperception Test)の手法を用いている。これはダム建設をめぐる態度調査で、5枚の絵を見せて、その反応を見るものだった(蒲生 1978:85-86)。当時、泉靖一は、後述するユネスコの調査に協力しており、当時の流行であった絵を見せて、それに対する意識調査をする手法を蒲生にも指示したのだが、蒲生が当時の調査を振り返って、ダムの工事関係者が地元の娘と歩いている絵を地元の人に見せて感想を聞くのは抵抗があったと語っていた。蒲生は、泉の片腕として、その後もブラジルの移民調査に同行しており、蒲生は、泉の調査活動を陰で支えていた。

1950年は、渋沢敬三を団長とする八学会連合調査団(のちの九学会連合調査団)の対馬調査が始まり、泉もそれに参加するが、八学会連合調査団については、別に原稿を起こすので、ここでは省略する。後の南米調査に結び付くのは、1950年5月から9月まで、東京に在住する濟州島出身者の調査である。これは、東京の特定地区に居住する濟州島250世帯を対象に調査を計画したが、朝鮮戦争の影響で予定した調査ができなくなった。最終的には73世帯の面接による調査票と聞き取り、諸行事の観察で調査が実施された。

この研究は、泉靖一の卒業論文となった「済州島」を基礎にしている。済州島民が東京に移住し、彼らの生活にどのような変化がおきているのかを調べるもので、調査票に基づく統計分析に加え、T・A・Tを用いているのは、先の十津川村での調査と同じである²。この調査結果から、泉が知る済州島の村落組織はほとんどなく、家族の構造も同本同姓（出身地と姓がいずれも同じ）の結婚の増加、本貫（本籍）の忘却などが見受けられた。また海女に代表される女性の労働が重要だったのが、東京では男の労働が中心になっていることなど、顕著な変化があることが判明した。その一方で、女性は伝統的服装の所持者は8割を超え、「豆の葉で巻いた飯」のような伝統食が保持されていることなどを報告している（泉ほか 1951）。この調査は、移民、文化変容、伝統保持などをテーマに、明らかにその後の南米の日系人社会での調査方法の原型となっている。ただし、T・A・Tは、この時を最後に、その後の調査では採用されていない。

第2節 南米移民研究

ユネスコは、1951年にブラジルで人種関係のパイロットスタディを実施した。その趣旨は、ブラジルが白人諸国で人種的緊張が最も緩慢な国であることに着目し、人種的緊張を緩和する方策を見出そうとするものであった。泉は、ちょうどこの時、ブラジルにおける日本人移住集団内部および外部に生じた社会的緊張の研究を主題とした奨学金の申請をしていた（泉 1972：3巻：217-218）。

「社会的緊張の調査」は、ユネスコが戦後の社会科学の国際的協力の対象として実施したもので、1951年から日本文学社会科学会が引き受け、日本人の社会にみられる緊張関係を多角的に取り上げた総合調査である。講和条約締結前の日本には、国連の外局であるユネスコの正式な国内委員会はなかったが、日本文学社会科学会に非公式の接触があり、1951年度の事業として、日本人の社会にみられる緊張関係の総合調査を企画した。8つの班に分かれ、文部省の科学試験研究費とユネスコ本部からの研究費の支援で研究は実施された。

泉靖一と、日本文学社会科学会の会長である尾高朝雄とは、京城帝国大学時代に尾高が山岳部長を務めていたことから、個人的な人脈があった³。泉は社会的緊張の調査班に属し、社会的緊張の理論と異民族問題を担当した。泉は、このプロジェクトで「東京小市民の異民族に対する態度」を報告しているが、民族の好き嫌いの順位を東京都内25か所で、20名のアンケートを取って調べる簡単なものだった。泉は、この調査以外に、このプロジェクトの一環として、フランスのボルドー大学教授ステゼルとオランダのライデン大学講師フォスを日本に招聘して、日本青年の態度がどのように変化したかを調べるプロジェクトにも協力した。この調査の成果は、ステゼルの助手をつとめた祖父江孝男によって『講和条約発効直前期における日本青年の心理態度：北海道および九州における調査報告』としてまとめられ（日本ユネスコ国内委員会 1953）、一般向けに『菊と刀なき日本』という表題の報告書が、ユネスコから出版された。これは、ベネディクトの『菊と刀』の著作を意識した調査だが、調査母体がユネスコなので、人文学会会長の尾高朝雄が全面的に協力

し、泉以外にも⁴、祖父江孝男、鈴木栄太郎のほか、ミシガン大学の岡山ステーションも協力している（ステゼル 1956：32、41-43）。

泉靖一が東京大学に赴任した翌年の1952年に、ユネスコ国内委員会の指名によりブラジルへ行くことになったのも、こうした会長との人脈と泉の十津川と新十津川の母村と移住村の比較研究の経験が決め手となった。泉は、ブラジルでの調査目的を、日系人社会の人種的緊張を研究するためだと述べていて、「社会的緊張の調査」の一環に位置付けていた。当時、ブラジルの日系社会は、日本が戦争に負けたことを受け入れる「負け組」と、戦争に勝ったと主張する「勝ち組」の間で社会的緊張があったが、激しい緊張状態にある日系人社会を日本人以外が調査することはできないため、泉の研究計画が受け入れられた（泉 1972：7巻：308-309）。

1952年10月から6ヶ月間、泉はサンパウロ社会政治学学院に所属する齊藤広志と共同で、ブラジル各地の日系人を対象に、調査用紙を用いた調査をおこなった。齊藤は、日本で中学を卒業したのち、移民としてブラジルに渡り、ジャーナリストとして活動しながら社会人類学を学んだ人物で、齊藤の全面的な協力で調査が実現した。泉は日本から持参した質問表と調査票を、現地で大幅に修正した。特に二世に対して日本語とポルトガル語の2通りの質問書に書きかえた。そのプリテストをしたうえで、サンパウロ新聞が新聞以外の印刷を中止してカードを印刷してくれ、それを持って南部ブラジルへ4ヶ月間、その後はアマゾンの入植地へ調査に出かけた。アマゾンの様子がブラジルに行けばわかると考えていたが、その旅が終わってそれが間違いであることが分かったとして、ブラジルの奥深さを実感している（泉 1972：3巻：221-226）。

泉は、勝ち組の中に、日本の敗戦を知りながら負け組の認識派に敵意を持つ強硬組と、本当に敗戦を信じないファナティコ（fanático 狂信者）に分かれ、いずれも負け組と妥協せずに対立していることを明らかにした（泉 1972：7巻：311-317）。この結論こそが、「社会的緊張の調査」に与えられた課題への報告であり、泉は依頼されたミッションを十分果たしたといえる。

この時の調査から、泉は齊藤広志との共著『アマゾン：その風土と日本人』（泉・齊藤 1954）を出版した。この本の「はしがき」で、1929年から37年までに2000人の日本人がブラジル南部に移住し、その残留者と子孫は1800人を超え、戦後になっても1952年から53年にかけて776人がブラジルに渡り、その後も増加すると予測している。この本は、戦後日本語で出版された、ブラジルの日系人社会の実態を統計的に分析した最初の概説書である。齊藤広志が担当した第1部のアマゾンニアの自然と人では、アマゾンの生態系や現地住民の概説が手際よくまとめられている。泉が担当した第2部のアマゾンニアの日本人では、南米拓殖株式会社が戦前から日本人を集団で入植させたテラ・フィルメの胡椒園と、アマゾンニア産業研究所が誘致したジュート栽培の移住地で、移住史、産業の概況、個人のオラルヒストリー、アンケート調査による社会状況の分析をしている。主テーマである敗戦の認識以外に、一世と二世の言語生活とか、二世の現地の同化速度、子供に対する

結婚への態度など、日本人移民が急速に現地に同化する様子が具体的に描かれている。

この報告は、戦後最も早い南米の日系人に関する調査報告書である。この著作によって、泉は戦後の研究対象となる南米への先鞭をつけたと同時に、次の外務省からの委託研究に続くのである。

第3節 南米移民調査

二度目のブラジル訪問は、1956年に外務省から「ブラジルにおける日本人移住者同化」についての実態調査とともに、南アメリカ人口会議への出席依頼により、すぐに再訪することができた。この時、泉は文化変容の問題として考え、飯塚哲人・蒲生正男・大野盛雄・島澄・斉藤広志と共同調査をした。調査は、現地での討論と調査収集で1ヶ月ほどかけて調査計画の全容を決め、サンパウロ州の各種の日本人入植地、および日本人同化過程との対比でパラナー州のポーランド移住者集団を調査地として選んだ（泉 1972：7巻：317-320）。この時の成果は、『移民：ブラジル移民の実態調査』（泉編 1957）にまとめられている。その構成は次の通り。

- 1 ブラジルの日系コロニヤ 泉靖一
- 2 小商品生産農家の成立過程：ノロエステ線ビラッキの事例 大野盛雄・宮崎信江
- 3 日系コロニヤ集団地の形態：北パラナー、アサイの事例 塚本哲人
- 4 大都市周辺農家の成立：サン・パウロ市近郊スザノの事例 大野盛雄・宮崎信江
- 5 開拓前線の日系コロニヤ：北パラナー、サンタ・イザベル・ド・イバイの事例 塚本哲人
- 6 地方小都市の日系コロニヤ：ソロカバナ線アルヴァレス・マッシュャードの事例 島澄
- 7 アマゾンニヤにおける日系コロニヤの同化過程：トメ・アスウ植民地 蒲生正男
- 8 移住船の調査 島澄
- 9 戦後移民の定着と同化：ドウラードス及びウーナ植民地の事例 斉藤広志
- 10 ポーランド移民の部落：パラナー州コテンダの事例 斉藤広志

この調査が外務省によって委託されたのは、日本の外務省が移民局を置き、移住者の募集選詮、旅費貸し付けを行う財団法人日本海外協会連合会を発足させて、ブラジルに移民を送っていたからである（泉 1957：25）。

泉は、この調査で「日系コロニヤの成立過程」を執筆しているが、第1は、アンケートの回答を基礎に、1955-56年の調査で面接した家族を加えて南部ブラジルで346家族、アマゾン地方で118家族のアンケート結果をまとめている。その点、前回の調査を踏襲しながらデータを増やして集計し、分析の記述を増やしているに過ぎない。

第2から第7は、それぞれ分担のコロニヤの入植の歴史、経済状況、社会変化の構成で、各自の専門を生かしながら調査をした結果をまとめている。塚本哲人は農村社会学を専門とし、大野盛雄は地理学であるが、島澄⁵と宮崎信江⁶は、その後研究者となった。

この報告書で、他の章と比べて異色なのは、第8から第10の調査である。第8は、1955年9月27日から45日間、神戸発のブラジル丸でこの調査のために渡航する際に同行した新移民の意識調査であり、第9は戦後新たに移民してきた日本人の定着と同化を、泉と第1回の調査の助手をした斉藤広志が担当し、また第10は、同じく斉藤が日系人調査の項目でポーランド移民のコロニヤを、調査したものが、日系人のコロニヤとの比較として報告されている。

この時の調査で移民調査の計画全容が決まりつつあったが、泉にとっては、第1回の調査を協力してくれた斉藤広志と南米を横断する旅行は大変貴重だった。この旅行で、二人は各地の日本人会に世話になったが、泉にとって重要なのはリマで天野芳太郎との出会いだった。天野は戦前パナマの天野商会を中心に中南米各国に事業を起こした実業家で、古代史に深い理解があり、泉はアンデスの遺物コレクションを見たいと希望していた⁷。天野に案内されて各地の遺跡を回り、泉はペルーの古代文明に本気で取り組もうと決心したと書いている。それは、この調査に出かける前、東京大学総長の矢内原忠雄より、「1年半ほどアメリカその他の外国で人類学の勉強しなすためにロックフェラー財団から渡航費を用意している」と告げられ、1年間ハーバード大学で人類学、考古学を勉強することが決まっていたからであった(泉 1972: 323-325)。

寺田は、泉がアンデス考古学に転向したのは、天野の情熱が泉に伝染してきたからだ表現している(寺田 1972: 388)。また別の角度から、泉の南米考古学への没頭の要因をコメントしている人がいる。それは終戦直後の引揚者救援組織で一緒に仕事をしていた田中正四で、戦後、泉が南米の考古学に打ち込んだ理由を「引き揚げと関係あるかもしれない」ともらしている(上坪 1979: 29)。また中国大陸での調査地の喪失とともに、終戦直後の経験、すなわち中国大陸から日本まで引き揚げる途中にソ連兵や現地民にレイプされて妊娠した女性に墮胎手術を施していた二日市保養所の壮絶な体験が、泉の転換期となっていると解釈した人もいた。

第4節 中東遺跡調査

1954年に東京大学で文化人類学教室が発足し、創設者の石田英一郎は、泉靖一、江上波夫とともに、新旧大陸における文明起源の比較研究という壮大なプロジェクトを発足させた(大貫 1997: 176)。

泉靖一が1956年にブラジルに行っている間、東京大学では大学レベルで南米調査の計画が進められていた。1955年の京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊や1956年の東京大学イラク・イラン遺跡調査団などで海外調査が実施され、東京大学でも地理学と文化人類学でアンデス合同調査団を出す計画が始められていた。そして、イラク・イラン遺跡調査団に参加していた地理学教室の多田文男が帰国するのを待って、文化人類学の石田英一郎を団長に、文部省の補助金交付や、読売新聞社への後援を依頼していた(寺田 1971: 401-402)。

このアンデス総合調査団の先に実施されたイラク・イラン遺跡調査団は、大学レベルでの大型調査団としてアンデス総合調査団の先行であるばかりか、調査の大枠を決めるうえでも重視された。

東京大学の考古学は、戦後の海外調査の中心的役割をになった。1955年11月に「イラク、イラン遺跡発掘委員会」が設けられ、東京大学総長（矢内原忠雄）を委員長、東洋文化研究所長（仁井田陞）を副委員長、関係部局長を委員とし、専門委員会がおかれた。委員には考古学、人類学、民族学、宗教学、東洋史学、西洋史学、東洋と西洋の美術史学、建築史学、自然・人文地理学、古生物学、植物学などの人文・自然両科学の分野にわたる専門家17人が選ばれ、「イラク・イラン遺跡調査団」を派遣する準備をした。1956年に、第一次東京大学イラク・イラン遺跡調査団で江上波夫を団長とし、曾野寿彦・増田精一・佐藤達夫（考古学）、新規矩男・深井晋司（美術史）、高井冬二（古生物学）、池田次郎（人類学）、小堀巖（人文地理学）、堀内清治（建築史）、阪口豊（地質学）三枝朝四郎（報道担当）、さらに朝日新聞から特派員1名、日本映画新社からカメラマン2名を同行させ、映像記録を記録した。

この調査団の団長をした江上波夫は、騎馬民族征服王朝説を唱えて、学会だけでなく一般的にも知られた存在になっていた。筆者も、戦時中に設置された民族研究所のことを聞くために、一度だけ会ったことがあるが、知的好奇心の塊の少年が、そのまま年を重ねたような人物であった。この調査団の団長を任された江上は、戦後すでに伏線としての活動があった。1949年に東西文化交渉史研究で著名なルネ・グルッセがフランス政府派遣の文化使節として来日し、東京大学東洋文化研究所の江上の研究室を訪ねてきた。江上は、戦時中に内蒙古のオロン・ムスで撮影した写真や、持ち帰ったオングト王府址やローマ教会堂址などの写真や出土品、景教十字墓石の拓本、元時代の陶器・瓦磚を見せた。すると、グルッセはオングト王府址やローマ教会堂址の発見は東西交渉史で重要なので、自分が館長をしているパリのギメ博物館で講演してほしいと依頼してきた。そして1951年9月にトルコのイスタンブールで国際東洋学会議が開催された時、日本代表として出席し、オングト王府址やローマ教会堂址を報告し、西アジアの代表から大歓迎を受けただけでなく、帰国前にパリに訪問してほしいと依頼された。そこで、パリのギメ博物館、イギリスのロンドン大学、ケンブリッジ大学、ローマのバチカン教皇庁のプロパガンダ大学で講演した後、レバノン、シリア、ヨルダン、イラク、インドの重要な遺跡を8ヶ月旅行した（江上 1986b: 344-345）。1954年に、江上はイラク政府考古総局のナジ・アル・アルシ総裁とバグダートで会見した。その後同総局から、オリエントを考古学のフィールドとして、古代文明の起源とその成立過程の解明をおこなう国際的な共同事業に参加し、メソポタミアで発掘調査をする意図が日本にあれば、便宜を図る用意があるという内容の招聘状が届いた。そこで東京大学イラク・イラン遺跡調査団が発足した（江上 1986b: 347）。

江上波夫を団長とする調査は1965年までの10年間に渡り5回実施された。この成果は、一般向けに『オリエント—遺跡調査の記録（1956-1957）』（東京大学イラク・イラン遺跡

調査団編 1958) と、全 15 巻の報告書が公刊された⁸。江上は、この 10 年の調査目的と成果を、次のようにまとめている。第一に、イランとイラクにおいて、初期農村遺跡を発掘調査し「文明の起源とその初期の発展の様相の解明」に寄与した。これについて、北イラクの同一地点で、初期農耕の原始的な段階から成熟期を経て初期の町邑に発展する過程を明らかにした。第二に、イランにおける遺跡遺物に即して「東アジア文明の一元流としての古代イラン文明」の解明に取り組んだ。これは、イラン北部のアルボルズ (エルブルズ) 山脈中のデーラマン盆地で、青銅器時代末期・鉄器時代初期からパルティア・ササン朝時代に至る各時代の古墳群遺跡の発掘により、紀元前 1000 年ないし紀元前 800 年ごろ、早くも騎馬民族的性格の強い高度な戦士文化を発達させ、その伝統がパルティア・ササン朝時代まで存続したことを裏付けた。またアケメネス朝時代に鉄製兵器が普通となり、パルティア・ササン朝時代となって吹ガラスやカット・グラス容器が使用され、三足土器が盛行したことが判明した。第三に、西アジアの重要遺跡を広く踏査し、主要博物館を歴訪してオリエントの先史・古代・中世の新しい知見と研究資料を持ち帰った。これも中東全域で遺跡を網羅的に踏破して各地の博物館を視察し、多数の写真と研究資料を入手している (江上 1986a : 39-43)。

第5節 アンデス考古学

泉は、1956 年から 57 年にかけて、ハーバード大学のゴードン・ウィリー教授のもとで南米の考古学を勉強した後、1957 年 6 月にペルー国立人類学・考古学博物のムエーを介して遺蹟発掘の正式許可を与えられ、同年 7 月から 8 月までペルー中部海岸チャンカイ河谷の発掘調査をおこなった⁹。寺田和夫は、泉靖一がハーバード大学で研究したことが、東京大学のアンデス研究調査団を生み出すきっかけになったと書いている。地理学の小堀巖は、すでにイラン・イラク発掘調査団に参加しており、その経験から調査計画を立てていた (寺田 1971 : 400)。しかし、泉の働きだけではなく、地理学の多田文男の海外調査も、東京大学のプロジェクトに影響していた。多田は、国際移住研究会の企画で 1956 年 8 月から 10 月末まで第一次アマゾン学術調査団を組織して、アマゾン地域の自然・社会・経済の基礎調査をおこなっていた (多田編 1957)。

東京大学では、読売新聞社からの提案もあり、地理学の多田文男と文化人類学の石田英一郎を中心に東京大学アンデス地帯学術調査団の計画を進め、旧大陸と新大陸の比較研究としてアンデス文明に起源研究とイラン・イラク発掘調査団の共同の企画とすることを決定した。そして既存のイラン・イラク発掘調査団の例に倣い、東京大学総長を委員長とする東京大学アンデス地帯学術調査委員会を編成し、国家予算の申請、読売新聞社・トヨタ自動車会社からの寄付、民間会社の後援により、1958 年 6 月から 11 月まで第 1 次東京大学アンデス地帯学術調査団を各地へ派遣した (東京大学アンデス地帯学術調査団編 1960 : 序)。

1958 年第一次東京大学アンデス地帯学術調査団は、石田英一郎を団長として、ペルー、

ボリビア、コロンビアでの調査をした。団員は、地理学の矢沢大二、佐藤久、小堀巖、河川工学の安芸峻一、人類学の寺田和夫、泉靖一、大林太良だった。目標は遺跡の総目録を作成することだったが、先史高文化地帯の遺蹟踏破は無理であり、航空写真を導入して、アンデス全体の環境を把握してから、その後の本格調査の準備とした。トヨタ自動車から5台のジープに日本人団員が乗り、海岸や山岳を踏破して予備調査をした。

第二次調査の団長は泉に任され、中央アンデス東斜面のコトシュ遺跡とペルー北海岸のトゥンペス河谷諸遺蹟の発掘をおこなった。団員は、前川文夫（植物学）、佐藤久・岩塚守公（地理学）、渡辺直経（人類学）、曾野寿彦・寺田和夫・大貫良夫（文化人類学）、貞末堯司（考古学）に加え、現地で民族学調査をしていた大給近達夫妻と佐藤信行も加わり、さらに山口というパリからペルーに来てとどまった異色の女性彫刻家も参加していた。この調査の終わりに、コトシュの人工築山の下層の無土器層から、大きな石造の建築を発見し、「交差した手の神殿」として大きなニュースとなった。

1963年の第三次調査は、泉を団長として、第二次のメンバーに加え、新たに田嶋久（地理学）、松沢亜生・友枝啓泰・宮崎泰（文化人類学）、狩野千秋（考古学）が加わり、コトシュ村ではベルトコンベアーも用意され、硬い鉄のやぐらも建てられて、大規模な発掘が始まった。

1966年には第四次アンデス調査がペルーに派遣され、近藤四郎・原子令三（自然人類学）、増田昭三¹⁰ 寺田和夫・大貫良夫・上野毅・山本宏義・友枝啓泰・宮崎泰（文化人類学）狩野千秋・松沢亜生・藤井龍彦（考古学）らにより、コトシュ遺跡の調査を継続し、新たにシャコト遺跡、ワイラヒルカ遺跡の試掘が試みられ、後者で複室の無土器神殿が見つかった。第五次アンデス調査隊は、泉が団長だったが、南部海岸のパラカス、タンポ・コロラド遺蹟への旅行と短期間の訪問だった（寺田 1971：403-411、関 2011：533-554）。

南米研究は、1968年に石田英一郎と曾野寿彦、1970年に泉靖一が亡くなって、一度現地調査は途絶えたが、1975年に日本核アメリカ調査団が寺田和夫を中心に組織され、ラ・パンパの発掘、1979年のカハマルカのワカロマ発掘と、再び発掘調査を行なうようになった。文化人類学の分野でも、佐藤信行は1958年から60年までペルーのクスコ地方の社会人類学的調査を行ない、友枝啓泰は1964年から67年までアヤクチョ地方の民族学的調査を行なった。その後両名はアンデス高地やアマゾン低地での調査と研究を行ない、東京大学のグループは、日本での南米研究において一定の研究集団を作っている（大貫 1981：6）。

泉のアンデス考古学については、その正統な後継者である関雄二が、現在の考古学のレベルで、極めて精緻で明快な評価を下しているのだから、ここでは、その要旨をまとめておこう。泉がアンデス地帯の旅行を通じて、「発掘される遺跡や遺物から推定される過去の生活と、現在のインディオのそれとのあいだに、あまりに強い同一性を見て、「歴史」の魔力に取りつかれてしまった」として、過去と現在の直接的連続を無条件に受け入れてしまった。そこには、特定地域に限定して、先史時代の解釈に民族誌やエスノヒストリーのデ

ータを利用するアメリカ考古学で比較的なじみがあるやりかたであると関は指摘している。しかし、現在ではスペイン人による征服以来の変化が指摘されており、先史時代と現在を直結する研究者は少ない現状を留保しながら、泉の時代的な制約について明確にしている（関 2011：531-532）。

また、泉が共感しているペルーの考古学者のフーリオ・C・テーヨが唱えるアンデス文明のアマゾン起源説は、当時「米国＝北海岸説」対「テーヨ・アマゾン説」の構図で考えられていたが、泉が考えていたよりも複雑であると関は指摘する。それは泉の関心が、古拙期（古期）から形成期の移行という文明初期の様相がアンデス全体で明らかにされていないことだった。採集狩猟と漁労の生業が、古拙期（古期）終わりころからの原始農耕により、織物が制作され、一部の地域で土器が登場すると考えられた。そしてそれに続く形成期は、人口が増加し、集落が形成され、その中心に神殿が建設され、やがて集約的灌漑農耕、集落の都市化、身分や階級制度の誕生と考え、テーヨが唱える文明形成論が、泉の関心を引いていた（関 2011：537-538）。

関の指摘で重要なのは、テーヨの見方が、20世紀初頭に、疎外され搾取された先住民の権利を擁護するインディヘニスモ（先住民主義）の思想・運動が展開され、考古学が国民統合を支えるイデオロギーの一つとして政治的に利用された時期であり、形成期研究が活況を呈していたことである。これはコトッシュ遺跡の発掘調査が、アンデス山脈東斜面で古拙期の神殿を発見したことにあり、アマゾン起源説を検証するものとして現地ペルーで容易に受け入れられたと指摘している（関 2011：545-546）。

関は、研究手法についても貴重な指摘をしている。東京大学の調査団は、常に現地ペルーの研究者や学生を受け入れて研究者養成を行っていた。彼らは、その後ペルーの考古学会を支える存在となり、研究だけでなく調査手続きの支援をする人的ネットワークが築かれたことである（関 2011：536）。調査の初期は学際的、分野横断的調査が模索されていたが、徐々に総合調査団から、大学院生が発掘助手として、将来の考古学分野の研究者養成へとシフトした。そして調査地に全員集合するのではなく、分散的に行動し、調査団として統一テーマを持たなかったが、考古学、植物学、民族学、社会人類学の分野で継続して調査をする基礎を築いたことは泉の功績といえる（関 2011：550-553）。

最後に、泉の貢献として啓蒙的一般書を多く著し、講演、新聞への寄稿などとともに、社会的影響が大きい古代アンデス文明を紹介する展覧会を開催した¹¹。1958年の調査開始から、泉が亡くなった翌年の1971年まで8回の展覧会が開催され、組織委員会を立ち上げて皇族、政治家、マスコミの重鎮を巻き込んでいた（関 2011：554-557）。この手法は、泉が、戦後博多で二日市保養所の活動について、高松宮殿下に保養所の視察を依頼し、病院関係者にねぎらいの言葉をかけてもらうことで、警察から犯罪に問われることがないように動いた時の行動をほうふつさせる。

泉靖一の影響は、社会人類学の学生にも及んでおり、考古学的素養が研究の伏線として役に立っている¹²。また関雄二も、考古学を専門にしながら、遺跡の盗掘者の調査から、

盗掘した遺物を治療薬として呪術に利用している実態を生き生きと描く民族誌も発表しており（関 2014）、社会人類学と考古学が相互に浸透しているのが、東京大学の南米研究の特徴である。さらに関は、アンデス考古学の第一人者として概説書を出すばかりでなく（関 1997）、「神殿更新説」という見解を示して、泉の着想を発展させている。これは、泉たちが発見したコトシュ遺跡の「交差した手の神殿」が、意図的な神殿の運用により、その上に同じ構造の建物を築いていく過程に着目し、余剰物が発生する土岐製作以前から、比較的小さな社会で開始され、社会の拡大により複雑化をけん引したという論で、泉の「初めに神殿ありき」という直感的な言葉が理論のベースになっている（加藤・関 1998）。

5 戦前と戦後をつなぐもの

日本の人類学は、敗戦により、それまで蓄積してきた海外の調査地を喪失してしまった。日本の海外エクスペディションについては、飯田卓がメディアとの関係で手際よくまとめている（飯田 2007）。これらの海外エクスペディションは、単発的に終わったものもあるが、その後の日本の人類学を形成する基盤となったものもある。

戦前からヒマラヤ登山を目指していた今西錦司率いる京都大学のグループは、サンフランシスコ講和条約を待って、直ちに海外調査を実施し、1955年にはカラコラム・ヒンズークシ学術探検を実現させた。それに続いて、東京大学のイラク・イラン遺跡調査、1957年に東南アジア稲作文化調査団、そして1958年東京大学のアンデス地帯学術調査団と、海外へのエクスペディションが実施された。本稿は、(1)に続く続編で、東京大学のアンデス地帯学術調査団を、泉靖一に焦点を当てて、彼の研究が、いかにアンデス考古学へと展開してきたかをまとめてきた。

戦後初期の研究者は、戦前、中国大陸での調査経験があり、特に考古学の分野で、東京大学の江上波夫や京都大学の水野清一は、戦前と同じ方法で、戦後は中東の発掘調査をした。つまり、シルクロードの東と西を戦前と戦後で発掘しており、その研究の枠組みから、写真集による発掘報告の様式もまったく同じである。人類学は、戦後になってアメリカの強い影響力で再編されたが、戦前の研究は、考古学同様、戦後も連綿と継承されながら、海外の人類学の動向を急速に吸収して発展した。

今西錦司や梅棹忠夫が率いた京都大学は、戦前から企画していたヒマラヤ登山が戦後によく実現でき、アフリカ研究は、モンゴル草原というフィールドを喪失した代わりとして見つけられたフィールドである。中尾佐助の照葉樹林文化論も、戦後に一般的になったのだが、その萌芽的な研究は、戦時中の西北研究所にルーツがある。これと同様に、泉靖一の研究の形成は、朝鮮、満洲、ニューギニアと植民地、戦争の影響が色濃くあるが、戦後は対象を日本、南米に向け、かつ専門も人類学から考古学に変更して、戦前からの連続性は顕在化していないが、その研究史をたどれば、やはり連綿として継続している。

本稿で論じきれなかった九学会連合、および戦後の人類学をけん引してきた東京都立大学の人類学をはじめ、戦後から始める人類学の系譜は、ほかにもあるが、人類学の歴史を

再構築するうえで、今後の課題としておきたい。

注

- 1 泉靖一の戦前の活動に関しては、前稿を参照（中生 2015）。
- 2 十津川村で試みた小学生児童の作文も、この調査で小学生の児童に「私の家」と題する作文を書かせて、家庭内の円満と不和を、父母の就労状態とクロスさせて分析している（泉ほか 1951：12）。
- 3 尾高朝雄は著名な法哲学者で、京城帝国大学に1928年から助教授として赴任して以来、ドイツ、イギリス、フランス、アメリカに留学し、ウィーンでハンス・ケルゼンの下で国家学、フライブルクではフッサールの下で現象学を学び、1944年から東京帝国大学法学部の教授となっていた。
- 4 この報告書にあるT・A・Tの絵は、ステゼルによると泉靖一の妻貴美子が描いたとある。
- 5 島澄は武蔵野女子大の教員となり、その後、泉靖一と蒲生正男とともに、マリノフスキーの『未開人の性生活』を翻訳している。
- 6 宮崎信江は東京大学の泉のもとで博士論文を書き、サンパウロ大学のパウリスタ博物館、ならびに考古学民族学博物館の教授をつとめた。著作として『裸族シャバンテス』（宮崎 1978）がある。
- 7 天野は、これらのコレクションを個人の博物館として開放しており、織物のコレクションについても出版している（天野 1977、1983）。
- 8 東京大学総合研究博物館 考古美術 http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKankoub/Publish_db/1997DM/chapter3/0315.html、2022年1月10日閲覧。
- 9 この時の記録は、泉靖一の自伝に触れてあるが、より詳しくは、泉靖一の妻、貴美子により紀行文が公刊されている（泉 1965）。
- 10 増田義郎は、本名を「昭三」という。これは昭和3年生まれでつけられた名前というので、本人が本名を大変嫌い「義郎」というペンネームを使うようになり、著作物はすべてペンネームで書くようになった（関雄二氏教示）。
- 11 飯田卓は、戦後の海外調査団が資金を得るために新聞社や映画会社などと提携するメディア・ミックスと名付けた戦略として分析している（飯田 2007）。
- 12 友枝啓泰は、泉の調査団に参加し、その後残ってフィールドワークを行った。友枝の民族誌にも、リヤマやアルパカの繁殖儀礼で、耳を切り落とす儀礼の記述のところで、家畜の耳を切り落として目印にするやり方は、モチエ期の土器にリヤマの姿を表したものがあり、チャンカイの遺跡から耳印のある土製の動物小像や耳飾りを付けた織布の動物人形が出土すると、フィールドで観察した事例と遺跡の出土品との対比をのべている（友枝 1986：77）。

参考文献

天野芳太郎選

1977『アンデスの染織：天野博物館染織図録』京都：同朋舎

天野芳太郎著；義井豊撮影

1983『ペルーの天野博物館：古代アンデス文化案内』東京：岩波書店

飯田卓

2007「昭和30年代の海外学術エクスペディション：「日本の人類学」の戦後とマスメディア」『国立民族学博物館研究報告』31(2)、227-285

石井素介

2010「第二次大戦後の占領下日本政府部内における「資源」政策研究の軌跡－経済安定本部資源調査会における〈資源保全論〉確立への模索体験－」『駿台史学』138：1-25

泉貴美子

1965『黄金の秘境：インカ探検記』東京：徳間書房

1972『泉靖一と共に』東京：芙蓉書房

泉靖一

1951『社会学講義資料：或る文化変遷のモノグラフ』東京：敬文堂書店

1957「日系コロニヤの成立過程」泉靖一編『移民：ブラジル移民の実態調査』東京：古今書院、11-127

1966『済州島』東京：東京大学東洋文化研究所

1971『泉靖一著作集6 文化人類学に何を求めるか』東京：読売新聞社

1972a『泉靖一著作集1 フィールドワークの記録(1)』東京：読売新聞社

1972b『泉靖一著作集7 文化人類学の眼』東京：読売新聞社

1972c『泉靖一著作集2 フィールドワークの記録(2)』東京：読売新聞社

1972d『泉靖一著作集3 文化人類学・思索の旅』東京：読売新聞社

泉靖一編

1957『移民：ブラジル移民の実態調査』東京：古今書院

泉靖一・斉藤広志

1953『アマゾン：その風土と日本人』東京：古今書院

泉靖一・祖父江孝男・岡並木・徳山安信・大給近達

1951「東京における済州島人」『民族学研究』16巻1号、1-24

上坪隆

1979『水子の譜』東京：現代史出版社

江上波夫

1986a『江上波夫著作集12 歴史・人間・旅』東京：平凡社

1986b『江上波夫著作集別巻 幻人詩抄 わが生い立ちの記』東京：平凡社

大貫良夫

1981「日本におけるラテンアメリカ研究 文化人類学」『ラテンアメリカ研究年報』1号、4-8

1997「アンデス調査の歴史」東京大学編『精神のエクスペディション』東京：東京大学出版会、176-187

2005「日本人のアンデス先史学45年」関雄二・木村秀雄編『歴史の山脈：日本人によるアンデス研究の回顧と展望：藤井龍彦教授退官記念シンポジウム報告書』(Senri Ethnological Reports, 55) 15-28

加藤泰建・関雄二編

1998『文明の創造力：古代アンデスの神殿と社会』東京：角川書店

蒲生正男

1978『増訂・日本人の生活構造序説』東京：ペリかん社

経済安定本部資源調査会事務局編

1949a『十津川郷の変容：水没補償の実証的研究Ⅰ』出版地不明

1949b『十津川郷の社会変容Ⅱ（新十津川村篇）』出版地不明：経済安定本部資源調査会事務局
ステゼル J. 著、大野欣一訳

1951『菊と刀なき日本：戦後の日本青年の態度 上』東京：平野出版

斉藤広志

1984『ブラジルと日本人』東京：サイマル出版会

関雄二

2011「東京大学文化人類学教室のアンデス考古学調査：泉靖一を中心に」山路勝彦編『日本の人類学』西宮：関西学院大学出版会、517-571

2014『アンデスの文化遺産を活かす：考古学者と盗掘者との対話』京都：臨川書店

多田文男編

1957『アマゾンの自然と社会』東京：東京大学出版会

友枝啓泰

1986『雄牛とコンドル』東京：岩波書店

2005「アルゲータスの亡霊」関雄二・木村秀雄編『歴史の山脈：日本人によるアンデス研究の回顧と展望：藤井龍彦教授退官記念シンポジウム報告書』（Senri Ethnological Reports, 55）41-48

寺田和夫

1971「編者あとがき」『泉靖一著作集 4 アンデスの古代文化』東京：読売新聞社、400-413

1972「編者あとがき」『泉靖一著作集 3 ラテン・アメリカの民族と文化』東京：読売新聞社、385-393

東京大学アンデス地帯学術調査団編

1960『アンデス：東京大学アンデス地帯学術調査団1958年度報告書』東京：美術出版社

1961『アンデスの発掘』東京：美術出版社

東京大学イラク・イラン遺跡調査団編

1958『オリエント—遺跡調査の記録（1956-1957）』東京：朝日新聞社

中生勝美

2015「植民地大学の人類学者：泉靖一論」『国際学研究』5号、47-69

2016『近代日本の人類学史：帝国と植民地の記憶』東京：風響社

2021「戦後日本の人類学史（1）」『社会科学研究』1号、139-160

日本文科学会編

1953『社会的緊張の研究』東京：有斐閣

日本ユネスコ国内委員会

1953『講和条約発効直前期における日本青年の心理的態度：北海道および九州における調査報告』
出版地不明：日本ユネスコ国内委員会

藤本英夫

1994『泉靖一伝 アンデスから済州島へ』東京：平凡社

ペーター・カウリケ、関雄二訳

2005「日本人によるペルーの考古学研究の重要性」関雄二、木村秀雄編『歴史の山脈：日本人によるアンデス研究の回顧と展望：藤井龍彦教授退官記念シンポジウム報告書』（Senri Ethnological Report, 55）29-40

宮崎信江

1978（1960）『裸族シャバンテ』東京：社会思想社